矢越駅

Yagoshi_sta.

優しい時間が流れる駅

JR大船渡線の「矢越駅」。昭和３年９月２日に千厩、小梨、折壁駅とともに開業した。開業当初は貨物の引き込み線もあり駅員も常駐していたが、58年３月、無人駅へ。
しかし、地元では「駅利用者の便利を確保」するため、国鉄OBらに窓口業務を委託。平成15年４月まで窓口業務を維持してきた。
駅のすぐ近くで自動車修理工場を営む芳賀三郎さん（69）が今回の案内人。
三郎さんを含む駅周辺の５軒の家が役割を分担、協力して清掃や草取りなどを行っている。「公共の場所ほどきれいに。それで使う人がさわやかな気分になれる。自然ときれいに使ってくれる。まず自分たちが手足を動かして、使う人の心を引き出すのさ」とあくまで自然体。
雪かきが行き届いた通路やホーム。待合室にはごみ一つなく、ガラスが見えないほど磨かれた窓とベンチに置かれたお手製の座布団が利用客を迎えてくれる。
窓から差し込む暖かな日差し、振り向けば室根山。小さく居心地がいい待合室には優しい時間が流れる。
矢越駅を出ると上り列車は、母なる室根山に見送られ、小梨駅に向かう。

優しい時間に浸れる駅

左：平成17年3月に改築された駅舎
右：トンネルを抜けると次の停車駅、小梨駅はもうすぐ

案内人
芳賀三郎さん　芳賀自動車整備工場

皆で駅の清掃などをはじめて25、6年。作業した後の慰労会も楽しみの一つ。作業中に運転士さんと交わす、ちょっとしたあいさつも励みです。

Iな人（あい）

いちのせきを愛する人

農業者は主役を輝かせるマネージャー
ノウハウさえあれば農業は希望だ

手掛ける商品に絶大なる自信を持ち提供する農業者

佐藤修司さん

Sato Syuji　48　農業　一関市厳美町

「葉っぱ一枚増えるだけでこんなに人生が変わると思わなかった」。こう話すのは、幸運の四つ葉のクローバーを栽培する佐藤修司さん。

転機が訪れたのは、山野草屋の店内。黒いクローバーを見つけ、パッとイメージが浮かんだ。「しあわせみぃつけた」と。しかし、これは園芸家なら誰でも知っているただのクローバー。「そんなもの売れるか」と批判を受けたりもしたが、2月のバレンタインから5月の母の日シーズンに的を絞って市場を確立。今年で10年目を迎えた。

クローバーの他にシクラメンやラベンダーなども栽培する。「競争することで誰かが不幸になるのは嫌」と誰もやっていないことをしてきた。初めに取り組んだのはシクラメンの小売販売。お客さんを前にする手前、手抜きはできない。自分の目で確かめて直接売ることで、販売の喜びを知った。他にも今までにない新たな手法を生み出した。「うちのシクラメンを買ったらよそからは買えないよ」と言い切る。

修司さんが考える物作りのコツは、決まった量しか作らないこと。作り過ぎた瞬間に商品の魅力が減るという。腹八分目が丁度いいのだ。

保証がない園芸品を作るだけに、東日本大震災時にはかなりうろたえたそう。農業をする限り、自然災害は付き物。自然とうまく付き合いながら、いろいろな条件をクリアしていかなければいけない。

「農業は見方を変えればやりようがある。地域の再生だってできるはず。農業はパンドラの箱に残った一つの希望。物を作る力があっても売る能力がなければやっていけない。それが分かれば産業は回るはずだ」と語る。「ノウハウは知りたい人には教えるよ。自分の役割は次の世代にどう残すか」と未来を見つめる。

農業は一筋縄ではいかない。植物は都合があって生きている。それをうまく取りこんで世話しなければいけない。「農業は作ったものが主役。自分の思いだけでやると絶対失敗する。生産者は、その都合に合わせながら主役が輝く方法を常に考える。そして、伝えたいことは全部商品にする」それがポリシーだ。

強気の修司さんだが「かわいい商品が作れなくなった時の自分の精神状態が怖い」と不安をのぞかせた。自ら決めている定年は55歳。それまで勢いは加速し続ける。

10万ポットを手掛ける、出荷最盛期のクローバー「しあわせみぃつけた」。葉が小さくて四つ葉が出やすい「クロバツメクサ」という品種だ。金運の五つ葉が出ることも。夜は葉を閉じて眠り、5月頃には清楚な花が咲く。

Profile　1963年一関市厳美町生まれ。サラリーマンを経て30歳でシクラメン栽培を始める。人と競争することを嫌い、誰もやっていないことに価値を見いだしてきた。手掛けたものは絶大なる自信を持って提供する。妻、子2人、両親の6人暮らし。一関市厳美町在住。48歳